

御袖縫御文説教

大家名説集第三

御袖縫り御文説教 目次

讀題

當流ノ安心ノヲモムキヲクハシク……………二六一

第一席 魂と相談せよ……………二六二

ざつこ知るには智慧が要る——平生業成の六字のお助け——お浄土は娑婆と隣り合せではない——矛盾の極——内證で地獄へ落ちる——魂と相談せよ——一人で行くな——そんならたゞかいなア

第二席 平生業成……………二六六

眞宗教義の組立——墮ちる機お助け、たのむ機お助け——坊主の方に争ひがある——平生業成の根源——墮ちる機を墮ちん機にするのが南無——まかせよの勅命で苦が抜ける——御座参りの目的——佛になりたいと望みの起きたは遍照の光明の御養育——心身命終に就いて——一念は一期に一度——今お助けに預るが肝要——お浄土参りを考へるご煩悶が増す——身は凡夫、心は聖衆——天狗同行の領解振り——貰はん先きにお禮を云ふか——西藏の奇習——魂が六字の主になる——お六字は浄土参りの道具ではない——攝取の光明に攝めこられ

てもまだ落ちるか——信こ願この交際——往けるこなつたら自分で往け

第三席 宿善と無宿善……

二六六

今お助けにあへ——安心せうと思ふな——意業募りこ法體募り——助けましませの出て来る本元——聽聞こ實地問題——向ふは明るいがこちらが暗い——手に物握つたやうに思へんがこれでよいかこ心配になるが宿善の機——詮じ詰めたら參れさうにない——ありべか、りの其儘——能歸の受手前——苦抜けの出來るこころ

第四席 一念と後念……

二九九

一念こ後念——信心は要らんか——彌陀に向ふ本元——御文を讀むこ解る——信心貫ふこころを受持つ——はつきりせん處が一つある——無條件こ條件——阿彌陀さんの御仕事は二重だ

第五席 疑晴れたら確になるか……

三〇七

三願共に宿善あり——たゞ聞くではない——教持の宿善——宿善の初まり——自力の機こ自性の機——間に合ふものが一つもない——ア、エーナー云はぬ——出すこ値打が下がる——或る女同行の領解——此儘ぢやらうか——一代の

間聞け——私こお六字こ差向ひ——私の胸は確になれんでもよいか——さうしても落ちさうだ

第六席 三願轉入と宿善……

三二〇

如信様こ覺惠法師この對論——三恒値佛の因縁——三願轉入と宿善——二十願の宿善の實例——第十八願直入の機は少い——佛教の土臺——大乘教の教へる處——小乗佛教と大乘佛教この相違點——世の盲冥を照す——汎爾、係念の宿善——一世や二世ではいかん——汎爾、係念は十九の願——見えんのが當り前——凡夫様が決めて落着く——知恩院様はこれでよい——宿善の厚い人は其處に居られぬ——二十の願へ這入る——ヒヨット今夜でも——お佛壇の下からナ——阿彌陀さん——十九二十を何故自力云ふか——此奴一つをさうしませう——サーミ踏み出しや何ンにも間に合はん——それから先きは此彌陀が護つて離れはこん——十九、二十の機が十八願へ這入る

第七席 本願一實の大道……

三四一

一遍に十八願へは這入れぬ——要門自力の機——信心貫うて御座りまします——自分で勤考せんならん——眞門自力の機——聞いた時だけ御尤——三本の指が折れるか——弘願他方の機——さうせうこ投げ出す處が十八願——自分で始

末をつけるから自力——無明業障の恐しい病——落ちるなりお助けこ、お浄土へ連れ込むとは違ふ——落ちる機を出せ、樂になる——一番奥を出して見よ——行持持たずの眞暗——さうする事も要らん——疑晴れてから助かるではない——捨る、さし置く、かへり見す

第八席 無理矢理に助ける……………三七五

私に皆様と思ふことが違ふ——夜明するのが信心だと思ふな——参らせて下さるに間違ひないに落着く——お阿彌陀様向きか、お浄土向きか——西の安心と東の安心——「墮しはせぬ」の親切に安心せよ——お膳の上の腹の中——萬劫の命拾ひ——初一念の時の出し物——踏出しが大事——一番悪い機を選び取る——阿彌陀様の目的と私の目的——一願一行も努めず——睨まにやなるまい——死んだらお浄土に行くな——これなら出せる——無理矢理に助けるが彌陀——「あながち」の解釋

第九席 地獄極樂どうでもよい……………三七五

往生の安心は後念の喜び——こつちは持たぬ——信心の土産持たず——任せやうが解らぬ——離れぬ彌陀を當てにせよ——解つた上でお慈悲一つこなれ——筋が違ふ——初一念は攝取の彌陀をたのため——まだいかん／＼——今日から此

機に用事なし——地獄極樂どうでもよい

第十席 目的が違ふ……………三六六

目的が違ふ——見る事も拜む事も想像も出来ぬ——命の終らぬたつた今——信心諍論の段を味へ——高野の明遍と念佛——九品寺の由来——長樂寺の末路——西山と鎮西と眞宗——西鎮は願文、眞宗は成就——願行門の扱——聖光房の落着——此頃の同行の落着——鎮西の安心は眞宗の後念——臨終にうろたへるな——安心決定鈔は西山の書——十劫曉天の御助——一益か二益か——現在安住の宗教——今が大丈夫——變らずに變る——無茶苦茶なお助——宿善の淺い人——向ふが明るいだけでは助からん——ようこそ其氣に——大事なく御文——本願の由来——腹帯しめてよく聞け——落しはせん念力——私ばかりは泣く機が受持つ機

第十一席 此機の儘では助からん……………四二二

光明の御養育——罪業は彌陀に任せよ——落ちるなりでお浄土へ——お浄土まで待たぬ——法藏菩薩の四選擇——諸佛は皆四弘誓願を發す——一人一日中、八億四千念——落ちる機の儘ではお浄土へは参れぬ——落しはせん念力を與へて助ける——功德成就と罪業消滅——向ふは見えんでもよい——心の展覧會

——落ちる機を自分で始末するな——苦しみを取るが御助——任せる辯

第十二席 自分で往くな

四二七

此機受持親であつた——眞似しようこかゝるな——根機にかなうた本願——あてが外れた——自分で往くな——新湯の老婆に受持つ此機——確になるの世話いらす——機の深信の話——雜行捨てず彌陀たのみず——命懸けでも引受ける

第十三席 遍照と攝取

四二八

一念の落ちる機に後念の落ちる機——棺桶の中まで離れぬ機——念力に業力——一念は魂に、後念は體に——煩惱が喜びの助縁——地獄種は何か——法身の光輪——三大阿僧祇劫の説明——一分の無明を除くに五十六億七千萬年——三惡道の暗闇がされる——遍照と攝取——遍照の光明の三徳——一に宿善を熟せしむる徳——二に無明斷破の徳——三に佛心廻向の徳——見せて置いて除く——光明の作用——私一人は落ちる——暗い明いば要らぬ——往生を手離して、攝取の彌陀をたのめ——そこはあなたのよいやうに

御袖縫り御文説教

大家名説集 第參

三井法雲師説

漢題

當流ノ安心ノチモムキチ、クハシクシラントオモハシ

ヒトハ、アナガチニ智慧才覺モイラス、タバワガ身ハ

ツミフカキアサマシキモノナリトオモヒトリテ、カ、

ル機マデモタスケタマヘルホトケハ、阿彌陀如來バカ

リナリトシリテ、ナニノヤウモナク、ヒトスズニコノ

阿彌陀ホトケノ御袖ニ、ヒシトスガリマイラスルオモ

ヒチナシテ、後生ヲタスケタマヘトタノミマウセバ、

コノ阿彌陀如來ハフカクヨロコビマシ〜テ、ソノ御身ヨリ八萬四千ノオホキナル光明ヲハナチテ、ソノ光明ノナカニソノ人ヲオサマイレテチキタマフベシ。

第一席 魂と相談せよ

ざつと
知るに
は智慧
がいろ

一 今日から八日の間話をする、今日は今が二時だ、これから二時間話をする、眠たい人は眠れよ、眠る人に關係はない、私は私の云ひたいことを云ふ。當流の安心のをもむきをざつと知りたいなら、智慧もいる、才覚もいる。くはしく知りたいなら智慧もいらん、才覚もいらん、面白くない、くはしく知りたいなら智慧もいる、才覚もいる、ざつと知るには智慧もいらん才覚もいらんと云ふならよく聞こえるが、ざつと知るには智慧もいる才覚もいる、くはしく知るには智慧

平生業
成の六
助字の
おけ

もいらん才覚もいらんとは可笑しいねえ、これはどういふ譯であるかと云へば、凡夫の自性ありきりを持つたなりで助けて頂くのだから智慧も才覚もいらぬのだ。凡夫の自性を改めて、參れるやうになり、落ちぬやうになり、助かるやうになるなら智慧もいる、才覚もいる、解つたねえ。

二 當流の安心は一念發起平生業成というて、たつた今お助に預かるのだ。命の終る時ぢやない、命の終る時に助けて頂くのなら平生業成ではない臨終業成である。平生業成とは目の見える、耳の聞こえる、性根心地の確かな今助けて頂くのだ。その平生業成とは南無阿彌陀佛の六字の御助に預かる事である、その六字の御助に預るのは臨終ではない、たつた今六字の御助に預るのだ。

三 全體お前さん等が聽聞する目的は、命終つたらお浄土、死んだら佛になりたいと云ふのだらう、その目的たるお浄土や佛は娑婆世界と隣ではない、五十二段も違ふ。一段や二段の違ひぢやない五十二段ぢやぞ。而し御信心を貰つたら隣にな

お浄土
は隣
は合せて
は合せて
はない

る、御信心を貫はぬ間は五十二段違ふ、それ故見ることも出来ぬ、拜むことも出来ぬ、考へることも出来ぬ、不可稱不可説不可思議というて、想像することさへも出来ぬ、その想像することさへも出来ぬ佛になりたいと云ふ望みが起つたと云ふことは、可笑しいねえ、矛盾も矛盾、一大矛盾である、こんな矛盾したことがどうして思へるか云へば、我々凡夫が思ふたのではない、阿彌陀様の幾世々々の御養育で思はせて頂いたのである。ところが此處に又一つ矛盾がある、今云つた通り思ふことも、考へることも、想像することも出来ぬことを、手に物を握つたやうになりたいと思ふぢやらう、之が矛盾の第二だ、さうして又手に物を握つたやうにならにや安心が出来ぬ。そこで確になりたい、落付きたい、參れるやうになりたい、落ちぬやうになりたい、なりたくとやつて〜やりまくる。そこで確に思へるがと心に問うて見ると、心は何と答へる、「思へん〜」と云ふだらう、此處はないしやうの處だ、表向は立派なお同行、ないしよで地獄へ落ちる、

ないしよ
で地獄へ落
ちる

大事な處ぢやねえ。そんな小さな目をして聞いて居ると猶更「思へん〜」が出て來るぞ、助けて下さるに間違ひない、參らして下さるに間違ひない、落して下さるにきまつて居る。そんなら確か、何となう先が暗い、あゝこんなことを思ふてはならん、阿彌陀様の御慈悲が丈夫ぢやもの、こんなことは思はんと置かう南無阿彌陀佛々々々々々々、これから先が南無阿彌陀佛の連發ぢや。

四 魂や今でもよいか、よいと云ふまい、間違ひないとは思ふて居るけれども、參らせて下さると思ふて居るけれども、丈夫なお慈悲ぢやと思ふて居るけれども、さあとなつたら何となうが出て來る、如來のお慈悲は疑やせんけれども、あやぶみやせんけれども、何が不足だ、不足はないけれども、これから「けれども」の連發だ。「けれども」の出て來る、確になれん、何となうがとれん、先が暗い、その機がお目當だ。確になつたら彌陀はいらん、落ちぬやうになれたら五劫永劫の御苦勞は水の泡だ。思へません、考へられませんが、想像することも出来ん

魂と相
談せよ

一人で
行くな
お浄土のことや佛のことは、なんぼ考へても解るものではない、そんなら浄土参りの方のことは考へるな、考へても煩悶するだけだ、浄土参りの方のことは止めにせよ。然らばどう落ちつくか。落付く落付かぬの世話止めて、落さぬ彌陀をあてにせよ、後生の一大事に就いてはそちらをむくな、自力を捨てるとは自分一人で行くな、付いて離れぬ親と一緒に明け。

そちの望みは命終つたら浄土参り、死んだら佛になりたい、これが望みだらう、而しなんぼ望んでも凡夫の力では参らりやせんぞ、そちの力では行かりやせんぞ、たつた今出掛けるとなつたら、先きが暗い、方角がたゝん、行場持たず、ありきりを出せよ、その眞暗がりの私へ、行き場持たずば此彌陀のため、方角知れずば此彌陀にまかせよ、どうしても確になれん、其處受持つが親ぢやぞよ、解つたか。

五 そんなら私の受持たせ心は、たのまれません、信せられませんが、安心が出
来ませんと行け此處がないしやうの處だ、確になつたか、落ち付いたか、何にもない、泣けよ、持つたなりぞ、そのまゝ来い、そなたの方は参ることになれやうがなれまいが、落ちんとなれやうがなれまいが、助かるとなれやうがなれまいが、そんなことはどうでもよい、参るの世話もいらなんだ、落ちんの世話もいらなんだ、助かるの世話もいらなんだ。

そんな
からた
アかい
な
そんならたいかいなア、たいぢや、あんまりうますぎるがと出て来る處ぢや。こんなことでもよからうか——と出て来る處ぢや、しつかり聞けよ。受持つ彌陀があつたもの、とやせんかくやせんの心配はいらなんだ、落付き心は、守つて離れぬ彌陀をたのむばつかり、付添ふ親をあてにするばつかり、親と一緒に來る氣になるばつかり。こちらから落付心を出すのぢやない。たのめよや——、まかせよや——の勅命から起させて貰つた心ぢや。

後生の一大事を彌陀にまかせた上からは、うんと云はうが云ふまいが、大丈夫

ど云はうが、云ふまいが結構と云はうが云ふまいが、私の心に用事はない、守つて離れぬ彌陀がある。